

論文

北アイルランド詩人の地名詩 ——シェイマス・ヒーニーの 「アナホーリッシュ」を読む⁽¹⁾

佐藤 亨

キーワード

シェイマス・ヒーニー
地名詩
北アイルランド

目次

- 一 アイルランド語地名とアイヌ語地名
- 二 アナホーリッシュ<アナハ・イール・イシュケ
- 三 「聴覚的想像力」
- 四 「故地にて」
- 注

一 アイルランド語地名とアイヌ語地名

本稿は北アイルランド出身の詩人、シェイマス・ヒーニー（Seamus Heaney, 1939-2013）の地名を冠した詩、‘Anahorish’（「アナホーリッシュ」）をあつかうが、そのまえに地名というものについて考えたい。その際、一気にアイルランドに飛ぶのではなく、身近な例から考えたい。そのうち、北海道のアイヌ語地名が示唆に富む。いくつか例を挙げるが、「室蘭」にスペースを割り、その地名の成り立ちを、ヒーニーが生まれ育った北アイルランド、デリー州南部の農場名、Mossbawn（「モスボーン」）とくらべてみる。

さて、人間はことばによって事物を認識するが、それと同様、人間は土地を名づけることによって場所を認識する。たとえば、「富士」山が「見」える「丘」という意味で「富士見ヶ丘」という地名がある。そう名づけることによって、土地は自然から文化（人間の生活）の次元に移行する。

「富士見ヶ丘」はありふれた例だが、こんどは二重地名について考えてみたい。二重地名とは言語が二重という意味である。土地の支配者が交代すると地名が変わることがある。名づけ主が変わるからである。そして、新旧の名づけ主の使用言語がちがう場合、地名はまったくべつなものに代わるか、あらたな言語によって変換される場合がある。

その代表例がアイヌ語地名であり、この場合、アイヌ語という旧住民の言語による地名が、日本語という新住民の言語に変換される。地名の日本語化、ないし和名化である。変換は一種の馴致であるが、「札幌」が「札」（サツ）と「幌」（ホロ）で「サッポロ」と読ませるように、音声とそれに当たる語は完全に一致しない。よく挙げられるのは「長万部」（「オシャマンベ」）であるが、これなど無理をした当て字である。

和名化の不自然さは、地名の意味を知ると、よりいっそう引き立つ。「札幌」は「乾燥した広大な地」、「長万部」は「川尻が横になっている川」という意味であり、それぞれの表記（漢字という表意文字）が喚起するものとはおおきくはなれている。それもそのはず、当て字は音声にたいしてのものであり、意味の側面には配慮されていない。なお、長万部はもともと「長万別」（オシャマンベツ）であった。旧称にふくまれる「別」はアイヌ語の「ベツ」の表記であり、「川」を意味する⁽²⁾。

さて、「室蘭」である。この地名も音声にたいする当て字で、その意味するところは「室」や「蘭」という表記とは無縁である。「小さな下り路」であると、アイヌ語地名研究の第一人者、知里真志保と山田秀三は言う。その著、『室蘭・登別のアイヌ語地名』から該当箇所を引く。

モロラン。ムロラン。（元室蘭、現在の崎守町）。原名「モルラン」（Morúran）。語原「モ・ルエラニ」（< mo-ruérani）。モは本来「子」、それから「小」の意味になる。「ルエラニ」は ru-e-ran-i で、ル「路」、エ「そこを」、ラン「下る」、イ「所」、すなわち「下り路」。ルエラニは急言すればルエランともルーランともルランとも発音する。モルランは「小さな下り路」の義。この地は現在の崎守町（元室蘭部落）であつて、早くから開けていたので、明治二年八月本道国郡設定の際、その名をとつて郡名とし、ついに市名となるに至つたのである⁽³⁾。

右の一節から三つのことがわかる。まず、地名の持つ意味である。「室蘭」は、もともと、すなわちアイヌの人たちにとっては、「小さな下り路」という意味であった。ただし、アイヌの人たちは「ムロラン」とは発音しなかった。そこで、二番目にわかるのは地名の持つ音声である。「ムロラン」（ないし「モロラン」）という現在の表記は「モ・ルエラニ」にもとづいており、そのうち「ルエラニ」が「ルエラン」ないし「ルーラン」、もしくは「ルラン」に変化し、「モ」と合わさり「モルラン」になり、それから「ムロラン」になっていったことがわかる。したがって、「モ・ルエラニ」＝「小さな下り路」であり、「ムロラン」＝「小さな下り路」とは、完全には言えないのである。

そして、第三にわかることは土地の所有についてである。最初に、「（元室蘭、現在の崎守町）。」とただし書きされ、最後に「明治二年八月本道国郡設定の際、その名をとつて郡名とし、ついに市名となるに至つた」と地名決定の経緯が述べられている。これは明治政府が「蝦夷」を領有化し「北海道」と改称したことについて言及している。この地名が市名として決定された明治二年以降、この土地は「モ・ルエラニ」というもとの地名からおおきくはなれ、国語である日本語で「室蘭」と書き「ムロラン」と発音することになったのである。このように、土地の所有者がアイヌ民族から和人にとって代わることでアイヌ語地名は和名化された。これはまぎれもない植民地化である。周知のように、いまでこそ、その蔑称はなくなったが、アイヌ民族は「土人」と呼ばれ、支配された。

以上が「室蘭」という地名が成立した経緯である。地名は馴致され、植民地化されたものの、音声の点では「ムロラン」に「モ・ルエラニ」の響きが宿っている。いっぽう、意味の点では跡形がない。しかし、実際に当地を訪れると、坂がおおいことがわかる。あるいは自転車に乗っている人がすくないことがわかる。坂がおおいので自転車での移動はきついのである。そうすると、「室蘭」という表記からは想像できないが、「ムロラン」という音声になおも内在するアイヌ語「モ・ルエラニ」の意味、「小さな下り路」がわかってくる。

さて、「室蘭」についての記述を、ヒーニーが生まれ故郷の農場の地名について述べた一節とくらべてみたい。第一評論集『プリオキュベーションズ』収録のエッセイ「ベルファスト」から引用する。

わが家の農場はモスポーン (Mossbawn) と呼ばれていた。モス (Moss) は、入植者がアルスターに持ち込んだスコットランドの言葉で、ボーン (bawn) はイングランドの入植者たちが砦付きの家に与えた名称だ。モスポーンはつまりbogにある入植者の家のことである。しかし、陸地測量図に Mossbawn と綴られているにもかかわらず、私たちはモス・バーン (Moss bann) と呼んでいた。バーン (bán) とはゲール語で白を表す。だから、白い泥炭湿地とか、ワタスゲの生育する泥炭湿地を意味するのではないだろうか。私はかかる故地の音節の中に、アルスターの引き裂かれた文化の隠喩を見る⁽⁴⁾。

室蘭の説明とモスポーンの説明は内容的に通じ合うのがわかる。ただし、右の記述は、アイヌ語（旧言語）地名が和名化（新言語化）された経緯とはちがう、逆の経緯が語られている。いわば、地名の植民地化ではなく、地名の脱植民化である。というのは、地名が支配者（植民者）の言語（新言語）

になったにもかかわらず、先住者の立場にある「私たち」は自分たちの言語（旧言語）に読み替えているからである。「モスボーン」というスコットランド語と「砦付きの家」という植民地化を反映したことばから成る地名は、「モス・バーン」とゲール語（アイルランド語）風に変換され、「白い泥炭湿地」ないし「ワタスゲの生育する泥炭湿地」と、あらたな意味を付与される。この地名の読み替えは、地名変換（翻訳）のさらなる変換（翻訳）である。そうすることで「私たちは」「入植者」から土地を奪回し、再所有しているのである。

あらためて述べることもなく、UK（英国）の正式名称は 'the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland'（「グレート・ブリテン—北アイルランド連合王国」）である。ヒーニーが「モスボーン」という地名をとおして、「私はかかる故地の音節の中に、アルスターの引き裂かれた文化の隠喩を見る」と述べるのは、アイルランド島北東部のアルスター地方九州のうち六州が一九二一年、北アイルランドとして英国に残留したと深く関係する。そして、英国残留の遠因をたどれば、一七世紀以降の植民に行きつく。ヒーニーが生まれ育った土地をふくむアルスター地方は、先住者カトリックとはちがう言語を話すプロテスタントが、とりわけ、イングランド系の国教会派とスコットランド系の長老派が入植し、土地を所有していった。その結果、アルスター九州のうち六州は、プロテスタント系住民が多数派を形成するにいたった。地名に関して言うと、所有者のアイルランド人の言語であるゲール語（アイルランド語）にもとづいた地名が外国語化（英語化、スコットランド英語化）されていったのである。だから地名は「引き裂かれた文化」の痕跡をとどめている。

先住者と入植者是对立関係にあった。そのなかで、地名は馴致されたものもあれば、まったくあたらしいものに代えられたものもある。

……共同生活体^{コミュニティ}を形成していたこの田舎^{カントリー}は分断された地域でもあったからでした。牧草地を輪を描きながら横切り、小麦の実る柔らかい土に巣穴を掘るウサギが通った跡にも似た、宗派同士の敵対と提携が描き出す曲線はそのままだけに土地の境界線にもなっていました。野原や^{タウンランド}区画地の名前、スコットランド方言とアイルランド語、英語の語源が混じり合う地名からして、田舎^{カントリー}のいたるところ、暮らしをたててきた者の歴史がしみついている。ブロッホ（Broagh）、ザ・ロング・リグズ（The Long Rigs）、ベルズ・ヒル（Bell's Hill）、ブライアンズ・フィールド（Brian's Field）、ザ・ラウンド・メドウ（the Round Meadow）、^{ダイメイン}直属地（the Desmesne）などがそのサンプルです⁽⁵⁾。

右の一節は土地の者以外にはわかりにくいところがある。そのひとつが「^{タウンランド}区画地」である。「教区の一区分」、「小区」などと訳される「タウンランド」（'townland'）とは、「その中心に農家が集まる農地の区画」のことである⁽⁶⁾。次章で見る「アナホーリッシュ」は「ザ・クレイ」（The Creagh、意味は「荒れ野」）というタウンランドの一部である。

なお、アイルランドには、アントリム州の「バリミーナ」（Ballymena）、あるいは州を問わずアイルランド島全体に散在する「バリベッグ」（Ballybeg）など「バリ」（Bally）がつく地名が多いが、

この Ballyこそ town ないし townland、また homestead（農場）という意味である。「バリミーナ」は「真ん中の町」、「バリベッグ」は「小さな農場」という意味である。ついでながら言うと、コークには「バリバーン」(Ballybane) という地名がある。これは「バリ」と「バーン」(*bán*) の組み合わせであり、意味は「白い町」である。ゲール語（アイルランド語）の *bán* は英語化されると ban ないし bane という形になる⁽⁷⁾。なお、アイルランドでみられる二言語（英語とアイルランド語）による地名標識については本論の末尾に付した二枚の写真を参照してほしい。一枚はアイルランド共和国南西部ケリー州ディングルで、もう一枚はヒーニーの故郷近くで撮影したものである。

写真からもわかるようにアイルランドには原語であるアイルランド語の響きをとどめている英語化地名が数多く、しかも、アイルランドの南北にかかわらずある。これは北海道にアイヌ語地名が数多くあることと同様であり、植民地化の結果である。しかし、同じアイルランドでも、一九四九年に英連邦から脱退しアイルランド共和国として正式に独立した南部とくらべ、北部は北アイルランドとして英国に残留している。したがって、英語化地名は、植民地化の負の遺産として、北アイルランドの現在にまで影を落としていると言えよう。英語化された地名なら、まだいいのかもしれない。なかには、ヒーニーが挙げるように、「ベルズ・ヒル」、「ブライアンズ・フィールド」、「ザ・ラウンド・メドウ」など完全に英語のものあれば、そのものズバリ、「^{ディメイン}直属地」という地名もある。これらは完全に征服者側が名づけた地名であり、旧地名は払しょくされ、跡形がない。

まるでパッチワークのように複数の言語からなる地名が交錯する「^{カントリー}田舎」、それがヒーニーの生地なのである。地名の複数性はそのまゝ、プロテスタントとカトリックという異なる宗派間の対立、あるいは、英国とアイルランドという異なる帰属意識のちがいをしめしており、北アイルランドの分断社会を反映するものだ。しかし、地名とはある意味、表面的なものである。また、「ブライアンズ・フィールド」など所有を表す地名がしめすように、地名とはある意味、恣意的なものである。したがって、土地との関係は、地名が変わったとしても、いぜんとして残るだろう。それゆえにヒーニーはつづけて言う——「土地は深いところにあり、神経組織に書き込まれた決して消えない手書き文字のようです」⁽⁸⁾。

二 アナホーリッシュ<アナハ・イール・イシュケ

「アナホーリッシュ」は一六行の詩である。第一連を引用する。

My 'place of clear water,'
the first hill in the world
where springs washed into
the shiny grass

（わたしの「水が澄んだ場所」／世界の最初の丘／泉が洗い／輝く草に入り）⁽⁹⁾

この書き出しは ‘Anahorish’ (「アナホーリッシュ」) というタイトルにつづくものである、という大前提をまず強調したい。タイトルは詩行にふくまれないが、詩のおおきな一部であり、その詩を代表するものだ。とりわけ、地名詩の場合、地名を冠したタイトルの重要性はおおきい。詩人は「アナホーリッシュ」と唱えたあと、「水が澄んだ場所」、「世界の最初の丘」と、まるでアダムが世界を認識していくように土地を名づけていく。詩行全体はわが国の短歌形式のようにコンパクトであり、そのぶん、イメージが鮮烈である。

文頭の「水が澄んだ場所」は「アナホーリッシュ」の意味(英訳)である。ただし、「ムロラン」=「小さな下り路」と、完全には言えないように、「アナホーリッシュ」=「水が澄んだ場所」ではない。‘place of clear water’ と引用符をつけているのは、一般的にはそういう意味であるという気持ちがはたらいっているのかもしれない。ヒーニーがこの地名について述べた一節をみてみよう——「モスボーンはブロッホ(Broagh)とアナホーリッシュ(Anahorish)に境を接していた。この二つの教区名はブルアハ(*bruach*)とアナハ・イール・イシュケ(*anach fhíor uisce*)というわれわれの喉が忘れてしまったゲール語の音楽を奏で、それぞれ『川岸』、『水が澄んだ場所』という意味である。二つの地名はケルトの薄明という文学的な霧をくぐり抜け、ケルト文明のただ中へと向かう」¹⁰⁰。

右の一節にある Broagh は先にも出てきた。わたしは「ブロッホ」と表記したが、人によっては「ブローア」と発音する。ただし、地元の人はいたいがい「ブロッホ」に近い音で発音する。この [gh] という口蓋摩擦音はなかなか表記するのがむずかしく、ヒーニー自身、まさに「ブロッホ」(‘Broagh’) という詩で、この発音についてつぎのように書いている—— ‘that last / *gh* the strangers found / difficult to manage’ (「あの最後の / *gh* 音、土地の者でないと / 発音しづらい」)¹⁰¹。「ブロッホ」も興味尽きない詩であるが、ここでは「アナホーリッシュ」に集中したい。

ヒーニーは「アナホーリッシュ」のもととの名、「アナハ・イール・イシュケ」について、「われわれの喉が忘れてしまったゲール語の音楽を奏で」ているという。この感覚などは、「ムロラン」と「モ・ルエラニ」とのあいだにへだたりがあるのかかわらず、もしかしたら「ムロラン」という音声に慣れてしまい、また、日常生活でも日本語を用いるために、「モ・ルエラニ」というアイヌ語の響きを忘れてしまったアイヌの人の思いに通じるものがあるだろう。

Anahorish は英語の地名としては一風変わった地名であるが、英語化されたという意味では「英語地名」である。しかし、「英語地名」といっても「ブライアンズ・フィールド」などとはあきらかにちがう。いわば、ゲール語(アイルランド語)の響きが内在する英語化地名である。この地名はきわめて北アイルランド的である。すなわち、地理的にはアイルランド島にあるものの、政治的には英国の一部という北アイルランドの特性(属性)と、アナハ・イール・イシュケがアナホーリッシュに変換されたことは一脈通じあう。

なお、Anahorish の意味であるが、アルスター地方の地名研究で知られるパトリック・マッケイが講演のなかでしめしたように諸説ある¹⁰²。すくなくとも三つの可能性があるようである。一番目が ‘(?) *Eanach Uaruisce*’ で意味は ‘marsh of clear water’ (「水が澄んだ湿地」)、二番目が ‘(?) *Eanach Uarghuis*’ で意味は ‘Horish’s marsh’ (「ホリッシュの湿地」)、三番目は ‘(?) *Eanach*

Fheorais' で意味は 'marsh of the river bank or stream' (「川岸ないし川の湿地」) である。以上、三説にはそれぞれ '(?)' が付せられている。これは確証がないということであるが、三つのうち、ヒーニーの解釈が一番目のものに近い。

アイルランドにおいて、地名の由来や神話語源などを詩篇や説話の形で伝える地誌的書きものを「ディンヘンハス」といい、それはわが国の『風土記』のように伝統的な文学ジャンルである。ヒーニーの詩はアイルランド文学の伝統につながっているとも言えるが、あくまで詩人の書く「ディンヘンハス」である。その際、詩人は地名の意味だけではなく、音声にも^{おも}り鍾を垂らしていく。それは「われわれの喉が忘れてしまったゲール語の音楽」を回復するためである。二連目から二行、引用してみる。

Anahorish, soft gradient
of consonant, vowel-meadows,

(アナホーリッシュ、やわらかい子音の／傾斜、母音の草原)

ここでは「アナホーリッシュ」という語の母音と子音が、詩人に景色を喚起する。「やわらかい子音の」以下の詩行が伝えるのは意味ではなく、音声についてなのであるが、もしかしたら「アナホーリッシュ」という地名がもつ「湿地」という意味について言及しているのかもしれない。いやむしろ、音声と意味の両面から「アナホーリッシュ」＝「水が澄んだ湿地」を再現していると言っているのかもしれない。

右の詩行につづくのは視覚的な連想である——'after-image of lamps / swung through the yards / on winter evenings.' (冬の夕方／揺れて庭をとおり／ランプの残像)。このように詩人は詩人なりのディンヘンハスを書き進める。とはいえ、地名を唱えながら、その音声と意味が喚起するイメージをとおして土地を認識・回想することは、詩人のみならず、おおくの人がおこなっているだろう。みなそれぞれ、「わたしの」「水が澄んだ場所」を持っているはずである。

さて、詩の最初に置かれた「わたしの」という所有格はきわめて重要である。というのも、この詩は詩人自身による土地の名づけ行為であり、ディンヘンハスであるからである。彼は英語化された地名をもつアナホーリッシュという土地を詩の空間で脱植民地化し、解放することによって、ゲール語(アイルランド語)が話されていた「ケルト文明のただ中へと向か」わせようとする。詩人はアナホーリッシュという土地について歌っているのであるが、それと同時に、詩という空間のなかにアナホーリッシュという土地を再現しようとしている。「わたしの」「アナホーリッシュ」を詩のなかにつくりあげようとしているのである。

三 「聴覚的想像力」

さて、前章でアナホーリッシュという地名をめぐる詩人の想像力の展開の一端を見た。アイルランド語の地名のおおくが英語化され、政治的だけではなく、文化的にも植民地されているなか、とりわ

け、北アイルランドのカトリック（被支配者）という立場のヒーニーの詩は、文化の脱植民地化ないし文化的独立を志向すると、ひとまず言えよう。ただし、それだけではない。失地回復のためだけに詩はあるのではない。詩の想像力をもっと自由である。

詩の契機となるものに「聴覚的想像力」がある。これは T. S. エリオットが編み出した用語で、その後、批評用語として定着した。ヒーニー自身、この用語を、自分に引きつけながら説明している箇所があるので、それを見たい。

T. S. エリオットが編み出した批評用語のうち最も明確で示唆に富む語の一つは、「聴覚的想像力」と彼が呼んだものでした。すなわち、「音節やリズムに対する感覚であり、思考や感情の意識層のはるか下まで浸透し、あらゆる言葉に生氣を与え、最も原始的で忘れ去られたものにさえしみ込んで、根源へと遡っては何ものかを取り戻し」、「最も原始的な精神と最も文明化した精神」を融合する想像力です。私のみるところ、エリオットはある一定の語やリズムに内在する文化的な水中爆雷とも言うべきものを念頭に置き、耳だけではなく精神や肉体の内奥まで喜びで満たす、詩における語の結びつきの秘密について語っている。また、語の内部や語と語の間で鼓動し、詩人の手によって解き放たれるエネルギーについて、さらには、純然たる音の構成あるいは分節音としての語と、意味を担った、人間の歴史や記憶や愛情などの表現媒体としての語との相互関係について語っているように思われます⁽¹³⁾。

引用が長くなったが、ヒーニーが「聴覚的想像力」についてこれほど力説し、ある意味、エリオット以上に、この用語に幅と奥行きをあたえ敷衍し、自己流に解釈しているのは、「聴覚的想像力」こそ、彼の詩が拠って立つものだからである。すなわち、ヒーニーは、語の音声を伝わって植民地化以前の歴史をさかのぼるばかりではなく、「神経組織に書き込まれたけっして消えない手書き文字」を求め、さらに奥へと分け入り（ヒーニーの詩「掘る」(‘Digging’) のように)、「根源へと遡って」「文化的水中爆雷」を詩のなかで実現させる。

聴覚的想像力はヒーニーのとりわけ初期の詩の特徴のひとつである。「ウンディーネ」(‘Undine’) もその一例である。詩の生成について、彼自身、つぎのように解説する——「私を最初に魅了したのは、暗い水たまりのような『ウンディーネ』というその音の響きでした。もし私たちの聴覚的想像力が一つの母音に錘鉛をおろしてその音の深みをはかることができ、最も原始的なものと文明化したものを結合しうるような状態に申し分なく調律されていれば、『ウンディーネ』という一語だけで詩は成立するでしょう」⁽¹⁴⁾。

「ウンディーネ」という一語だけで詩は成立する、とヒーニーはいう。同じように、「アナホーリッシュ」という一語だけで詩は成立するのであろう。しかし、聴覚的想像力はいったん動き出すと、一行では済まなくなる。「ウンディーネ」も一行では済まなかった。ヒーニーはさらにつづけて言う——「『ウンダ』(unda) は波のこと、『ウンディーネ』(undine) は水の女です。ウンディーネと唱えれば、そのリズムの内部で潮の干満、水と女性、実現と消尽がこだまする」⁽¹⁵⁾。「ウンディーネ」のイメージ、

そしてその音の響きは詩人を魅了し、奥へ、奥へと詩人をみちびく。そうして詩は書かれるのである。

さて、「アナホーリッシュ」はどのようにつづくのだろうか。「冬の夕方／揺れて庭をとおり／ランプの残像」を見た詩人はつぎになにをみるのだろうか——‘With pails and barrows // those mound-dwellers / go waist-deep in mist / to break the light ice / at wells and dunghills.’（桶を積んだ荷車を押し／／あの塚に住む人びとは／霧の中に腰までつかり／井戸や堆肥の山で／薄い氷を割る）。詩は冬の土地のイメージで終わる。「水が澄んだ場所」と、水で始まる詩は、「薄い氷」と、やはり、水で終わる。

詩の空間は、築かれるや、土地という具体的な空間と交わる。詩人がおこなう土地の名づけ行為とは、詩という空間に土地を呼びこむことなのである。実際の土地という空間と、詩という芸術作品の空間との交感、あるいは両者の共鳴、そういう特徴をヒーニー詩はそなえている。

この特徴はうまく説明できないが、アイルランドを代表するトラッドのグループ、クラナドのヴォーカル、モイラのことばがヒントを与えるだろう。クラナドはメンバーがドニゴール（Donegal、「異邦人の砦」という意）出身で、アイルランドを拠点に演奏活動をしているが、いっぽうで、ロンドンのスタジオで録音したり、あるいは、電子音楽を用いたり、その活動はいわゆる伝統音楽の枠組みにおさまらない。伝統音楽をたえず更新していると言っていいだろう。しかし、そういうクラナドにとって、最初と最後にあるのは土地、すなわち、故郷ドニゴールである。クラナドの音楽も土地の名づけ行為なのだろう。

わたしたちがアルバムを作るとするでしょ……わたしにとって審判の日というのは故郷のドニゴールへ帰る日なの……そこでカセットをかけてみて、あの場所にふさわしいと感じられるとすれば、その時ようやく喜ぶ気になる……そうやって自分の音楽を評価するわけ……ドニゴールに帰るのは大好き。長い目で見て故郷こそが、そして故郷だけがクラナドにとって靈感の源泉だわ⁽⁶⁾。

四 「故地にて」

シェイマス・ヒーニーは二〇一三年八月三〇日に急逝した。彼は、その翌月の九月二〇日、地元マヘラフェルト（Magherafelt、「フィールタの平原」という意）で開催される詩のフェスティバル、‘On Home Ground’（「故地にて」）で詩の朗読をすることになっていた。しかし、突然の死によって、朗読会は急きょ、詩人を追悼する会となった。会には北アイルランド中から詩人が集まり、一人一人、ヒーニーの詩を朗読した。「シェイマスが死んだことは知っている。しかし、そのことがまだ信じられない」などと、予期せぬ死にたいし、詩人たちはことばをうしなっていた。

ヒーニーの功績は輝かしい。詩では『あるナチュラリストの死』（*Death of a Naturalist*, 1966）から『人間の絆』（*Human Chain*, 2010）まで一三冊を、評論では『プリオキュペイションズ——散文選集 1968～1978』（*Preoccupations: Selected Prose 1968-1978*, 1980）から『詩の矯正——オックスフォード大学講義録』（*The Redress of Poetry: Oxford Lectures*, 1995）まで三冊を出版した。そして、それぞれのジャンルで、『開かれた大地——選詩集 1966～1996』（*Opened Ground: Poems 1966-*

1996, 1998) と『見つけた者が持ち主——散文選集 1971～2001』(*Finders Keepers: Selected Prose 1971-2001*, 2002) という事実上の自選集を出版した。さらには、ギリシア劇の翻訳が二作、また、テッド・ヒューズと英語詩のアンソロジーを二冊編んでいる。ほかに翻訳や編集など、枚挙にいとまないが、こうした偉大な業績にたいし、一九九五年にノーベル文学賞、また、ホワイトブレッド賞を二度(一九九六年、一九九九年)受賞するなど、数々の文学賞に輝いた。アメリカの詩人、ロバート・ローウェル(Robert Lowell, 1917-1977) はヒーニーを「イエイツ以来のアイルランド詩人」と呼んだが、それも詩人の経歴前半での呼称である。

ヒーニーの死を悲しんでいるのは詩人だけではない。フェスティバルには地元からおおくの人びとが参加していて、いちように喪失感をあらわにしていた。ヒーニーの兄弟の姿もあった。そんななか、「死んだことは悲しいが、シェイマスはおおくのものを残してくれた」というのが、せめてもの前向きなことばであった。彼の詩や評論は、アカデミズムだけではなく、おおくの人びとによって、今後もしも読まれ、その評価はますます揺るぎがないものになっていくだろう。

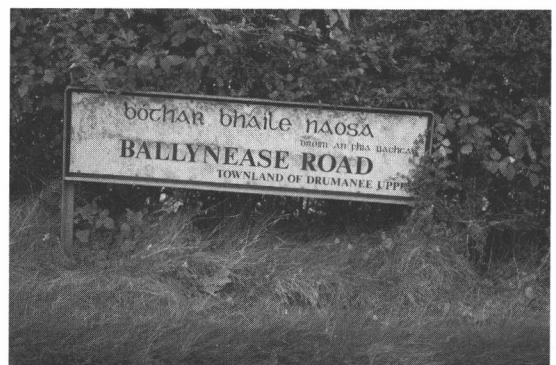
もし朗読がおこなわれていたら、そのリストに「アナホーリッシュ」は選ばれていただろうか。それはわからない。だが、フェスティバルには、あらかじめ「ヒーニー・カントリー・バスツアー」というプログラムが組み込まれていて、それは予定通りおこなわれた。われわれはバスに乗って、デリー州南部の、詩にまつわる場所をいくつか訪れたが、そのなかにアナホーリッシュがあった。これといって特徴もない、のどかな田園だった。

最後の夜、ウェールズの国民的詩人、ジリアン・クラーク(1937-) が詩の朗読をして、三日間にわたるフェスティバルを締めくくった。彼女は自作を読む前に、ツアーに言及し、ヒーニーの詩が「ありふれた」('ordinary') 土地をめぐって書かれていることがわかって新鮮だったと述べた。

「アナホーリッシュ」は北アイルランドの片田舎のありふれた土地に寄せて書かれた詩である。



標識の上にある Annascaul (アナスコール) は Abha na Scail に由来する。このうち Scail は伝説上の英雄の名前。意味は「スコールの川」である。標識の下にある Tralee は Trá Lí に由来する。このうち Lí は川の名前。意味は「リー川の岸辺」である。「11」と「31」はマイル数を示している。



Ballynease (バリニーズ) は Baile Naosa に由来する。このうち Naosa は人名。意味は「ネーサの町」である。ここは Drumanee Upper (ドラマニー・アップー) というタウンランドに所属する。

注

- (1) 本研究は二〇一三年度「青山学院大学経営学会研究助成金」を受けた。記して感謝する。
- (2) 「札幌」と「長万部」のそれぞれの意味については、三省堂編修所編『北海道地名小辞典』（三省堂、一九七八年）、八六頁、四四頁参照。
- (3) 知里真志保・山田秀三「其の二 室蘭市のアイヌ語地名——地名の由来・伝説と地図」、『復刻版 室蘭・登別のアイヌ語地名』（知里真志保を語る会、二〇〇四年）、九頁。
- (4) シェイマス・ヒーニー『プリオキュベーションズ——散文選集 1968～1978』室井光広・佐藤亨訳（国文社、二〇〇〇年）四七-四八頁。以下、『プリオキュベーションズ』と略記する。
- (5) 『プリオキュベーションズ』、二一頁。
- (6) Anne Fegan, Peter Corr and Stephen Roulston, *Geography Pathways: Key Stage 3 for Northern Ireland* (London: Hodder Murray, 2007), p.13.
- (7) Adrian Room, *A Dictionary of Irish Place-Names Revised Edition* (Belfast: Appletree Press, 1994), pp.21-23.
- (8) 『プリオキュベーションズ』、二二頁。
- (9) Seamus Heaney, *Wintering Out* (London: Faber and Faber, 1972), p.16. 以下、*Wintering Out* と略記する。詩の引用には試訳を付した。
- (10) 『プリオキュベーションズ』、四八頁。
- (11) *Wintering Out*, p.27.
- (12) パトリック・マッケイの代表的な著作は以下の通りである。Patrick McKay, *A Dictionary of Ulster Place-Names* (Belfast: The Institute of Irish Studies The Queen's University of Belfast, 1999), Patrick McKay and Kay Muhr, *Lough Neagh Places: Their Names and Origins* (Belfast: Cló Ollscoil na Banríona, 2007). なお、地名に関する三つの説は、二〇一三年九月二日、北アイルランド、デリー州マヘラフェルトで開催された詩のフェスティバル、'On Home Ground' での氏の講演、'Heaney Country: its Townlands and Parishes'（「ヒーニー・カントリー——その^{タウンランド}区画地と^{パリッシュ}教区」）でしめされた。
- (13) 『プリオキュベーションズ』、二七二頁。
- (14) 『プリオキュベーションズ』、七七-七八頁。
- (15) 『プリオキュベーションズ』、七八頁。
- (16) ヌーラ・オコーナー『アイリッシュ・ソウルを求めて』茂木健・大島豊訳（大栄出版、一九九三年）、四〇頁。